

識者の話

中嶋嶺雄・東京外語大教授

(現代中国学) 戒厳令解

除が当初の見通しよりかなり遅れたのは、指導部に解除のスケジュールをめぐる意見対立があつたからだろう。西側からの資金導入のストップや観光収入の激減など、天安門事件以降の深刻な経済環境を打開する狙いが解除の背景にある。しかし国内情勢は依然安定しておらず、要人に

経済の打開を狙う

対する襲撃事件が伝えられたり、ルーマニアのチャウシェスク前大統領夫妻処刑の知らせに学生が爆竹を鳴らしたともいう。問題は何一つ解決しておらず、今後も天安門事件のような反乱が起こる可能性は十分ある。

川島弘三・防衛大教授(国際関係論) 中国の戒厳令は

他の国と違って軍に権力が集中するのではなく、軍による第一級の警戒体制を意味する。西側の経済援助を取りつけるため名目的には解除

実質的な戒厳続く

したわけだが、実質的な戒厳体制はまだ当分続くだろう。民主化へなだれをうつつ東欧の情勢は遠からず中国にも波及しようし、中国指導部は市民や学生の動きに神経をどがらせている。指導部内の対立も激化の様相を見せており、戒厳令解除とは裏腹に混乱の度合いが強まるのではない

か。日中文化交流協会常任理事の作家野間宏さん、ひとまず最悪の状態を脱したという意味で歓迎していいのではない

文化交流も復活へ

か。天安門事件が報道されたような軍隊による市民への発砲事件だとすれば許せないが、それだけを理由に現中国政権を全面否定しようとは思わない。日中間には重い歴史もあり、最近では文学、映画など文化交流もかなり深まってきた。戒厳令解除によってそつした交流も復活するだろうし、天安門事件はあくまで胸の中に置いて、市民レベルの交流を重ね、その中で新しい良い成果を生み出していくべきだと思つ。

流血の記憶心に重く